

恋をしたわけではありますが

昼瀬七

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スクールアイドルになんて興味は無かった。

所詮はプロの真似事だと、学生のお遊びなんだと、真剣にそう思っていた。

だけどある日、連れて行かれたスクールアイドルのライブで彼女を見つけてから、私の世界は一変する。

亜麻色の髪、キラキラと輝く蜂蜜色の瞳。歌って踊って汗をかいているのに、それさえも煌めいて見える笑顔。そして何よりも、甘い声が耳の奥に残っている。

目が離せなくなって、我に返ったのは声を掛けられてからだだった。私はその瞬間、ステージ上の彼女に抱いた感情は、いくら疎くても分かった。

私はその日、南ことりに恋をしたのである。

目次

嘘のようで本当の話	1
願うはそんな幸せ	7
答え合わせを求む	10
なんてことない日	14
もどかしい距離	17
自分のペースで	21
見ていたくて	23
四葉のクローバー	26
形勢逆転?	30
プロローグの情景	33
2人それぞれ	35

嘘のようで本当の話

父の仕事の都合で引っ越すことになったと告げられたのは2週間前。特に交友関係が広いわけでもなかった私は別れを済ませ、そうして新居へとやってきた。新居とは言ったものの、どうやら数年前からこの地に移ることを計画していたらしい。無駄に広い家の中は無駄に綺麗に保たれていた。

手伝ってもらいながらも、やつとの思いで荷解きを終える。レイアウトは少しずつ整えて行けばいいし、元々私の荷物は多すぎない。

「終わったよ」

「お疲れ様。今紅茶淹れるわね」

「ああ、うん。ありがとう。ねえ、それより……」

「今日は引越し祝いでレストランの予約を取ってある。少し寛いでから行こうな」

「分かった……」

聞こうとしてもはぐらかされてしまう。私の通うことになる学校について、2人とも口にしてはくれない。

父が予約したと言っていたレストランは落ち着いた雰囲気、何とも形容しがたい幸福感が得られた。

家路につく最中も、あからさまに話題を変えられる。確かにレストランでの料理は満足したし疲れたから帰ってすぐに眠りたいところではあるけれど、それよりもっと大事なことが残っている。

「……ねえ、そろそろ教えてよ。私の学校、前日まで焦らしておいて、まだ内緒にするの?」

「はあ……仕方ない。教えてやるから少し待ってろ、制服を先にお披露目してやる」

「いや制服お披露目って着る側がやるやつじゃ……?」

そんなこんなで、本日2度目の紅茶を頂きながら、私は制服の到着を待っていた。前の高校に入る時にも見たダンボール箱を開封すると、あの日から幾度か目にするようになった制服が、そこにある。

「……これ」

「音ノ木坂の制服よ。碧、あなたは明日から音ノ木の生徒になるの」

言葉にならない複雑な気持ち。あのμsと、南ことりと同じ学校に通えるんだっていう喜びと、今まで通り遠くから密かに応援することとは出来なくなるんだっていう寂しさ。2つを不器用に抱えて、私は

それでもやっぱり、嬉しかった。

「久しぶりね、碧ちゃん」

「……お久しぶりです、南さん」

「ふふ、ビックリしたでしょ？」

「ええ、とても。どうして思い出せなかったのか不思議です」

ニコニコ笑う目の前の女性、音ノ木坂学院の理事長を務める南さんは、母の古い知り合いだそうだ。幼い頃、家に遊びに来ていた彼女とは何度か顔を合わせたことがあり、その時に学校を経営しているということも聞いていた。

そして数ヶ月前、遊びに来た彼女が「娘がスクールアイドルをやっている」と話していたことを、私はすっかり忘れてしまっていたのだ。

「……母に、どこまで聞きましたか？」

「そうねえ、碧ちゃんがうちの子を好きだったことまで」

「……その、なんかすみません。ライブを観るまで本当に、彼女のこと

を知らなかったんですけど……」

「歌って踊る彼女らには、言い難いような魅力があるものね。私は別に構わないわ、ことりが傷つかないのならそれで」

「……………」

自惚れているだけだとは思うが、南さんのその一言はまるで「あなたになら娘を任せられる」と言っているようだった。もちろん気のせいのはずだが、どうしてか引つかかる。

「まあ、そんなことはさておき。碧ちゃんは今日から音ノ木の生徒になるわけで、今日は忙しくなるわよ？」

「平気です、むしろ過ごしやすいくらい」

「その歳でワーカホリックってどうなの」

「なんの事ですか」

「いいえ、とりあえずは職員室に行きましょうか。担任に挨拶と、その後すぐに教室に」

「はい」

連れられるまま職員室で挨拶をし、それから教室へ向かった。生徒数の減少については以前聞いていたし、μ、sの活躍で廃校を阻止できたのも大変喜ばしいことではある。しかし今現在の生徒数は少ないままで、2年生は2クラスしかないんだとか。

つまり、南ことりと同じクラスになる、なつてしまう確率は2分の1。そう、運が良ければ、回避出来るような確率。

しかし天は私を見放した。いや、本来なら喜ぶべきなのだろうけれど。私は彼女らと関わるつもりなんて無かったと言うのに。

「柏木碧です、よろしくお願ひします」

「じゃあ席は……南さんの隣で」

「はあい、私です」

手を挙げて返事をした、甘い声の持ち主。亜麻色の髪に蜂蜜色の瞳。あの日から幾度となく見てきたその容姿に、改めて胸が高鳴るのが分かる。逸る鼓動を抑えて、彼女の方を見やれば、ニツコリと満面の笑みを浮かべていた。落ち着け、彼女は私の事なんて知らないんだ。

「南ことりです、よろしくね?」

「よろしく、お願いします……」

頼むから、顔が赤くなつてたりなんてしないでくれ。

願うはそんな幸せ

幼い頃、お母さんに連れられ訪れた大きなお家で彼女と出会った。難しいお話は分かんない、退屈になった私が1人で家の中を探検している時に彼女が声をかけてくれた。

「……きみ、どうかしたの？」

「お母さんたちがお話ししてて、ことりつままないの。あなたは？」

「私は、本をよんでたら足音がきこえたから。同じくらいの子がこの家にいるの、はじめて見た」

「大きなお家なの？」

「1人っ子なんだ。ねえ、よかったらいつしよに遊ばない？たいくつなんでしょ？」

「いいの？本をよんでたんじゃ……」

「あとでもよめるよ。私はことりちゃんと遊びたい」

そう笑って手を差し出してくれたのが、柏木碧ちゃん。名前は帰ってからお母さんに聞いたんだけど。

兎にも角にも、私はそうやって彼女を知った。遊んだのはその日の数時間だけだったけど、今でも覚えているほど色濃い思い出だ。

そして同時に、初恋でもある。

チョコレートブラウンのショートカットに、同じ色の大きな瞳。当時からボーイツシユだった容姿は、どうやら大きくなっても変わらなかつたらしい。おかげで私はすぐに彼女だと気がつけた。グレーのカーデイガンもまた、どこか大人びた雰囲気を漂わせる。

数日前、お母さんに碧ちゃんが転校してくることを教えてもらった。たった1日会っただけのあの子に心を奪われ続けていた私に、それは嬉しすぎるサプライズだった。どうやら当の本人は聞かされていないらしいけど。碧ちゃんのお母様から、お母さんを通して私のファンだということも知った。スクールアイドルを始めて良かったと、邪ながらにそう思ってしまうほどに。

席が隣になったのも、偶然。偶然に偶然が重なればそれはきっと必然になる。そしてそれを、人は運命と呼ぶのだろう。

これは全部、神様が私たちに与えてくれた運命。

「碧ちゃん、ことりのこと覚えてる?」

「……………え?」

「小さい頃、会ったことあるんだよ?」

「えっと……………すみません、小さい時のことはあんまり覚えてなくて。家には頻繁に誰かが来ていましたから、特定の1人を覚えることもなかつたかと」

「そっかあ……………」

残念だけど、碧ちゃんは私のことを覚えていないらしい。それもそうだよ。覚えていたら、私を好きになつてくれたステージですぐに気づくはずだもの。

でも、諦めない。両思いだつていうのは分かつてるもん。夢中にさせて碧ちゃんの1番、貰っちゃうからね。

そんな私の気持ちは露知らず。目が合うだけで顔を赤くしちゃういじらしい碧ちゃん。キョんキョんする胸と、思わず上がってしまう口角。可愛いなあなんて言つたりしたら、きつともつと赤くなつてしまふだろう。

もつと色んな力オが見たい。恋に浮かれた頭は、もうすでに碧ちゃんदैいっばいになつちやつた。

答え合わせを求む

同じクラスになってしまった以上、下手に関わらないことも出来ない。ことりちゃん隣の席というのもあって、あつという間にμ、sの2年生とお近付きになってしまった。2人のことを呼び捨てで呼ぶことに落ち着いたのだが、どうもやっぱりことりちゃんのは呼び捨てに出来ない。

不満そうに唇を尖らせた姿に胸が傷んだが、一転して悪戯に笑った彼女にまたときめいたので、もう余計なこととはしないことに決めた。

そんなこんなで、放課後のμ、sの練習にお邪魔することになった。どうしてか私が彼女らのファンであることがすでに暴露されていて、消え去りたいような認知して貰えて嬉しいような、そんな複雑な気持ちである。

一通りの自己紹介を終え、何事も無かったように練習に入るμ、s。それをボーッと眺めていると、背中に頭を押し付けられる感覚。9人のうち、そんなことをしてくる人物には1人しか心当たりがなく。

「久しぶりだね、真姫」

「ええ、久しぶり。会いたかった」

「大袈裟。ご両親はどう？元氣？」

「当たり前よ。そっちは？」

「もちろん。真姫はまだ、医者志望？」

「……あなたがそのつもりならね」

「なら良かった。忘れられたんじゃないかって思ってたから」

「忘れるわけ、ないじゃない。碧が居なきや、私はとつくに自分を見失ってるわ」

「よく言うよ」

赤い髪に手を伸ばす。相変わらず綺麗な髪だ。

西木野真姫。彼女の両親共に、うちの親と仲がいい。お父様は総合病院の院長を務めているらしく、父とは医大生の時から仲らしい。一方で母親同士は高校が一緒だったそうで、世間は狭いとよく口にしていた。

我が家に遊びに来ていたり、西木野家に遊びに行くこともあったため、昔から真姫とは仲が良かった。私が高校生に上がってからは交流が途絶えてしまっていたが、こうして再会できたのだし無問題。

始めてμsを知ったあの日、実は後から動画を漁っていた時に真姫の存在に気がついた。私を知る彼女は歌って踊るアイドルどころか、他者と距離を詰めることさえ無い子だったから、少しだけ驚いた。同時に、どうしてか置いていかれたような気分にも。

「真姫がアイドルね。音楽、続けられて良かったね」

「ええ、心底そう思う。碧に届けられて良かったとも、あなたへの大きな感謝もね」

「何もしてないよ」

「いいからちよつと……撫でてもらえると、嬉しい」

「はいはい」

そうして抱きしめて、頭を撫でてあげる。小さい頃の真姫にも良くこうしていたことを思い出す。不思議そうに目を丸くさせた凜と希が、不意に口を開いた。

「甘えんぼ真姫ちゃん、珍しいにや」

「そやねく。なんや、碧ちゃんと真姫ちゃん、知り合いやつたん？」

「はい、親が仲良いんです。よく家に来ていたし遊びにも行っていたので、真姫のことは妹みたいに思ってるくらいですね」

「私も、碧のこと姉だと思ってる」

「……ことりのことは覚えてなかったくせに」

「うぐつ……本当にごめんなさい……」

ジト目のことりちゃんに見つめられてしまうと、罪悪感が倍になって押し寄せてくる。覚えていないのはしょうがないと言ってはくれたものの、好きな人との思い出があったのなら思い出したいと願うのは欲張りなんかじゃないだろう。

「えへへ、ちよつとイジワルしちゃった。そんな顔するなら、碧ちゃん思い出そうとしてくれてるでしょ」

「まあ、はい。記憶力には自信があるので、関わりがあったなら思い出せるかと」

「ごどりのこと忘れちゃった罰はあ、ずーつとごどりのこと考えることで償ってね♡」

「……っ」

「……碧、もういいわ。ありがとう」

「そう？いつでも言っよ」

離れていく真姫を見送る。視界の隅では、ごどりちゃんがまた頬を小さく膨らませているのが見えた。

ここまで来ると、本当に自惚れているわけじゃないのかもしれない。い。

なんてことない日

帰り道、今日の思い出を振り返るかにように碧ちゃんの話をする穂乃果ちゃん。彼女のおかげで、あの子がアイドル研究部に入部することになったので、私としてはもう大満足。本当にいつもありがたいとうつて改めて言うと、不思議そうに首を傾げられた。知らなくてもいいよ。

そう言えば、海未ちゃんが口を開く。綺麗な青髪を耳にかけながら私を覗く姿はきつと、今まで何人も女の子を落として来たんだろうな。

「ことりはずいぶん碧と打ち明けましたね」

「そうだね、穂乃果もビックリした」

「ことりね、小さい頃に碧ちゃんと会ったことあるの。1回だけお家に遊びに行ったことがあって、それからずっと片想いしてるんだ」

「ひえっ……道理で大胆なことしてたわけだ」

「そんなに？ことり、はしたない子って思われてないかな……？」

「大丈夫だと思いますよ。だって碧、こたりのこと好きでしょう」

「だね！ニブチン海未ちゃんでも気づいてるくらいだもん」

「穂乃果？」

「だって穂乃果も鈍いし。碧くんには負けるけど」

「碧くん？穂乃果ちゃんそうやって呼ぶの？」

「うん！だってあの子、クールじゃん。ウチのクール担当より何倍も」

「すみませんね、クールに見えなくて」

「あくまでメンバー目線だから！」

碧くん、かあ。確かにすごく凛としていて、女子校の音ノ木には珍しいタイプではある。それこそ生徒会長の絵里ちゃんとか、海未ちゃんみたいなタイプがモテるから、きっと碧ちゃんもモテモテになるんだろう。

なんか、すごくイヤだ。

「……やっぱり、碧ちゃん絶対モテるよね」

「そうだろうね」

「今までどうだったんでしょか。今度それとなく聞いてみますね」

「え？海未ちゃん珍しいね？」

「穂乃果やことりが聞くよりかは話してくれるかと。特にことりには話せないんじゃないですか」

「それは……ことりもそう思う……」

私と会話をするだけで顔を真っ赤にする今の碧ちゃんには、真正面からそういうのは聞けそうにない。最も、碧ちゃんの恋愛事情を聞くのは私の精神衛生上よろしくもないし。

「でもね、誰が碧ちゃんを好きになっただって、ことりは譲らないもん」

「そもそも碧くんがことりちゃんを手放すかってなるよね」

「心配する必要は無さそうです」

2人のそんな会話に、愛されてるんだなあって胸が暖かくなる。もちろん私も穂乃果ちゃんと海未ちゃんが大切な人を見つけたら、その人とのことを応援したくなるから、きっとそういうことなんだろう。

「ありがとう、2人とも」

お礼を言う。とぼけることも無く、2人はいつも通りに笑っただけだった。

もどかしい距離

「碧、ちょっといい？」

「はい？」

ここに手招きされて、大人しく着いていく。部室を出て被服室まで辿り着いた時、ようやく呼ばれた理由に気がついた。思い詰めたような横顔ですら綺麗なのだから困ってしまう。よろしくねと呟いた先輩に変わって私がやることはただ一つ。

「ことりちゃん」

「……………」

「ことりちゃん。……はあ、失礼します」

その頬に恐る恐る手を伸ばす。触れてようやく私がいることに気がついた彼女は大層驚いている。驚かせようと試みたことではあるけれど、どうしてか私も恥ずかしい。

「碧ちゃん、いつから……っ」

「つい先ほどです。呼びかけても反応しなかったのはことりちゃんの方ですよ」

「それはごめんね。何か用？」

「帰りましょう。送っていきます」

「え、大丈夫だよ。穂乃果ちゃん達と一緒に帰るし、碧ちゃん方向違つたよね？」

「穂乃果も海未も先に帰りました。そもそも、予定の時間を過ぎているのは君ですからね。ここが心配していましたよ」

「むむ……でもほら、ことり元気だよ?」

「じゃあ、まだ一緒にいたいので送っていきます」

みるみる顔を赤くしていくことりちゃん。きつと負けないくらい私の顔も染まっている。それでも心配な気持ちは嘘じゃないし、まだ2人でいたいのも嘘じゃない。

これ以上のやり取りは必要ない。ことりちゃんはこくりと頷き、それから静かに片付けを始めた。本当は手伝った方が良かったのだからうけれど、何やら焦った様子の彼女に下手に手を出すのも危ないだろう。

「お待たせ、碧ちゃん」

「いえ、待っていないので。それじゃ行きましょうか」

「ことりの家、場所分かるの?」

「……先週、実はお邪魔しまして。母の用事に着いていくからと練習のサポート出来なくて申し訳なかったので、黙っていました」

「ふうん……ことりに内緒で、ウチに来たんだ」

「南さん、私に対して少し強引な所があるので、断れないんですよ。それに、そのおかげでこうして一緒に歩いていられるんですから、機嫌を治してください。ね?」

特に怒っているわけでもなかった彼女は、頬をぷくりと膨らませてあからさまに不機嫌を表した。でもそれはほぼわざとのようで、指でつつくとすぐに笑みをこぼす。

薄暗い道を2人で歩く。2人きりなんて学校でもそんな時間はなくて、それが帰り道になると尚更だった。彼女の隣にはいつだって穂乃果と海未がいる。私の入る隙が無いわけじゃないのがまた、少しだけ遠く感じてしまう理由なのかもしれない。もしくは、未だ手の届か

ない存在だと、そう認識しているだけとか。

「……碧ちゃんは」

「はい」

「こどりのこと、どう思う？」

「……っ」

無垢な蜂蜜色がそう告げる。本人を目の前に言及を避けようとする私と、それを許さないこどりちゃん。彼女の自宅はもう目の前で、別れを惜しむ間も無くの問答。誰かに聞かれたら、見られたらどうするんだ。

出てくるのは、そんな臆病な逃げの一手。

「私、は……」

「……こどり？ 碧ちゃん？」

「お母さん……!?!」

「話し声が聞こえたから……邪魔しちゃった？」

いたたまれない空気を破ったのは、音ノ木坂学院の理事長だった。そう紹介すれば聞こえは言いものの、つまるところこどりちゃんのお母様である。

南さんは、私の腕を掴んで離さないこどりちゃんを見て申し訳なさそうに言う。慌てて離れていくその温もりを寂しく思う余裕が、まだ私にはあつたみたいだ。

「こんばんわ。遅くなったのでこどりちゃんを送りに来ました。それ

「じゃあ、私はこれで」

「あ、待って碧ちゃん。良かったら晩御飯どう？」

「え？」

「ことりも、まだ一緒に居たいみたい。それとも何か用事があったりする？」

「いえ……」

南さんの提案に、今度はジツと目を合わせてくることりちゃん。きつと彼女は勇気を出してくれたんだ。だからその反動で今言葉に起こすことが出来なくて、代わりに行動で伝えてくれている。それなら、言葉に出せず逃げた私にも踏み出せる確かな一歩。

「では、お言葉に甘えて。だから大丈夫ですよ、私は帰ったりしませんから」

「ほんと？」

「……いえ、さすがに遅くなるまでには帰らせてくださいね」

「ふふ、ことりってば嬉しそう。ありがとう、碧ちゃん」

キラキラした瞳はまるで幼子で、そんな彼女が嬉しそうに家の中へと私を引きずっていく。

どうか、これが友人の延長戦ではありませんように。彼女が私との時間を噛み締めていますように。

願わくば、同じ気持ちならいいな。

自分のペースで

恥ずかしくて死ぬるほど顔が赤くなつたため、私は夕食の準備に取り掛かる。疲れてるでしよって半ば強引に押し切つてキッチンに立つも、頭が冷静になるまでもう少し時間が掛かりそうだ。

なんで私、あんなこと聞いちやつたんだろ。

碧ちゃんは私が彼女のことを好きだつて知らないのに。信じないのに。自分の気持ちですら伝えようとしてくれないのに。

私のことどう思うつて聞いた時、少しだけ困つた顔をしていた。それは質問に答えられないのでは無く、そんな質問をした私に困惑している証拠だ。

私のこと好きなくせに、逃げちゃうんだ。碧ちゃんはいつも私のことばかりで、自分のこと考えないで、だから私は勇気を出してみたりして。私の幸せに自分が関わっているのなんて考えたこともないのだろう。

心做しかいつもより柔らかい笑みを浮かべてお母さんと話す彼女の背中に抱きついてみたいのを抑えて作業を進めた。

あんな顔している碧ちゃんを見たら、また顔が熱くなって来ちゃつたし。

「ことり、さすがに何か手伝うわよ?」

「じゃあ、出来たお皿を運んでもらつてもいい?」

「ええ、いつもありがとう、ことり」

「いえいえ、お疲れ様、お母さん」

そんな会話を、微笑ましそうな顔をしながら聞いている碧ちゃん。彼女の元に料理を運んでいくと、その瞳がキラキラと輝き出す。年相応どころか、それ以上に幼く見えるその表情は、再会してからいくらか経つても初めて見るものだった。

「碧ちゃん、お母さんには連絡入れた?」

「はい。南さんの家なら問題ないと。今度また、菓子折でも持って遊びに来ますね」

「本当?」

「今度は、ことりちゃんに会いに。それならいいですよね?」

真姫ちゃんや海未ちゃんにするような、イジワルな笑顔。この顔を見れるようになるまでここ数週間が無駄では無かったと言われているようで、1人報われたような気分になる。

「約束だよ、ことり待ってるから」

「はい、必ず」

これで碧ちゃんとの約束は2つ目。小さい頃のたった数時間を思い出すことと、私に会いに家に遊びに来ること。2人の秘密が増えていく度、碧ちゃんが少しずつ歩み寄ってきているような気がして、どうも心が踊ってしまふ。

チラリと盗み見た彼女の横顔はいつもと変わらなくて、それがいつしか日常になっていくことを願った瞬間、目が合った。なんだろうね、好きって言葉じゃ表せないくらい、私は欲張りさんになっちゃってるのかも。

そのくらい、優しい碧ちゃんは許してくれるよね?」

見ていたくて

「真姫」

「何よ」

「見えてる？あれ」

「見えてるわよ」

「じゃあさ」

「嫌」

「まだ何も言っていない」

ピアノの前で私の肩に頭を預ける真姫。特等席で頬を膨らませて不機嫌を訴えることりちゃん。笑いを堪えるエリーとここ。羨ましそうに眉を上げる凜。笑ってる海未と穂乃果。大爆笑の希。1人可哀想に困惑し続ける花陽。

どうして私はそんな渦中にいるのだろうか。

「甘えすぎ。一応みんなが見てるんだから、多少なりともしつかりしなさい」

「今さらあなたに甘えてたって誰も気にしないわよ」

「ことりが気にしますく!!」

「少数派の意見は聞き入れられないのよ、ことり」

「真姫ちゃんのイジワル！碧ちゃん、……ことりもそっち行ってもいい？」

「両肩に人の頭が乗るのはちよつと嫌です。重いので」

「むくくく！」

「ぶはっ……ホント、碧って意外と辛辣よねえ」

「にこ、笑つちやダメよ……ふふ、」

「碧ちゃんのばか」

「仕方ないでしょう。私は1人しかいないんですし、真姫が離れることもないみたいですし」

かと言って、これ以上ことりちゃんにそんな悲しそうな顔はさせてられない。どうにか打開策、もしくは折衷案を出さなくちゃいけないのだが、やっぱり人の頭がもう1つ乗るのは嫌だ。重い。そもそも、作業中だったはずである。

そうか。不満があるなら、それを忘れるくらい他の何かでかき消してしまえばいいんだ。

例えばそう、羞恥心とか。

「ほら、そんな顔しないで。約束したでしょう？会いに行くって」

「わあっ……！碧ちゃん、その言い方じゃ……！」

「なにになに？なんの話にや？」

「この間、ことりちゃんに内緒で南家にお邪魔したんです。そうしたら彼女、凄く寂しかったみたいで、ことりちゃんに会いに行くために遊びに行く約束したんですよ」

「そうなの、ことりちゃん？」

「そうだけどお……」

「2人きりの時に甘えてくださいね。今度は絶対拒否したりなんて、しませんから」

「……ばか」

予想通り顔を赤くして黙り込んでしまった彼女。あまり見ることに無いその表情に、どうも不思議な感覚が胸に残る。見せたくないなんて思う資格が私にはあるのだろうか。

「……あなた、そんな大胆なこと出来るようになったのね」

「まあね。やられっぱなしは嫌だから」

「告白すればいいのに」

「んん……今はまだ、このままでいいかなって」

「なんで？」

「嫉妬している顔も可愛いからね。見てみたいって言うのが本音で、建前はそんな勇気が無いからってことにしておいてよ」

「普通逆でしょ」

「いいの。せつかく、正面からこうしてからかえるようになったんだから。もう少し楽しもうと思ってる」

「良い性格してるわ、本当」

「褒め言葉として受け取っておくよ、真姫？」

ことりちゃんを囲む喧騒の外、真姫とそんな会話をする。彼女が私のことを好きでいてくれる事が分かった以上、変にドギマギすることもない。

私を見る柔らかい瞳が伝えてくれる感情に、ようやく慣れてきたところだから。

噛み締めてもバチは当たらないだろう。そう祈って瞳を閉じた。

四葉のクローバー

最近なんだか、碧ちゃんにからかわれるようになった気がする。出会った時に比べれば態度が軟化したというのは喜ばしいことではあるのだから、常に優位に立っていた立場が脅かされていると言っただけ、少しだけ面白くないのだ。

碧ちゃんが私のこと大好きだっていうのは知ってる。だから私もちよつぴり大胆にアピールしてみたり、そんな勇気が空回ったりしていたわけで。

告白してみたら、今度はもう逃げられないんじゃないかって、伝えてくれるんじゃないかって、淡い期待を抱いてみる。

隣を歩くチョコレートブラウンが揺れる度に、胸が苦しくなるのはもうイヤなのに。

どうしてこんなに、勇気が出ないんだろう。

「碧ちゃん」

「はい」

「もういいよ、すぐそこだし。送ってくれてありがとう、また明日ね」

「……分かりました。黙ってしまうのなら追求しません、ですから。

泣かないようにだけ、約束してください」

「泣いたりなんて……しないよ」

「嘘ばかり。元気な君に会えるのを、楽しみにしていますね」

どんなに酷い顔をしていたら、優しい彼女にそこまで言わせるのだろう。泣くな、なんて、不器用な碧ちゃんらしい簡潔な一言。

別れを告げて、家の中に駆け込んだ。挨拶もなしに音を立てても、咎めるような人はまだ帰ってこない。

ごめんね、約束は守れないかも。

だってこんなにも苦しいんだよ、痛くてしょうがないの。ことりのせい、碧ちゃんのせい。

でもやつぱり、臆病者で意地っ張りな、私のせい。

何がダメだったんだろう。小さい頃に初めて会って好きになって、実らない片想いを拗らせたのがいけない？

それとも、優しい碧ちゃんに甘えてばかりでからかい過ぎた罰？

「訳わかんない……」

ベッドに倒れ込み、そのまま胸の内を零した。

碧ちゃんが他の女の子と仲良くしてるのを見るのが嫌。碧ちゃんの顔が見れなくて、背中を向けられるのがたまらなく苦しい。

あの綺麗な瞳に私だけ写っている瞬間が欲しい。私にしか見せない柔らかい微笑みだつて知っている。

溢れた涙は収まることを知らない。それはまるで私の気持ちのよう。うで。

「すき、あおちゃん」

「泣かないでって、言ったのに」

突如響く呆れた声に、殺していた泣き声もピタリと止んだ。ついさっき別れたはずの彼女の声私を見下ろして、同時に振り返れない恐怖に襲われる。

涙でグズグズの顔なんて見られたくない。約束を破った悪い子の私を、今彼女はどんな顔で見ているだろう。

「あお、ちゃん……なんで……」

「きつと泣いてしまうんだろうなと思ったから。鍵くらい閉めて、誰かが入ってきたらどうする気なの？」

「ごめんなさ……っ」

「ことりちゃん、こつち。見て、ちゃんと」

「やだ、」

「やだじゃない」

いつになく強い口調の彼女に、本能が警告を鳴らす。何がいけないのか、具体的なことは鈍い頭じゃ分からないけれど、良くない気がする。それだけは確かだった。

私より何倍も強い力で、彼女は私を振り向かせた。仰向けになった私の視界に照明が入ってきて、その眩しさに思わず目を瞑る。引つ付いた髪を避ける碧ちゃんの手は、ほんのり冷たかった。

「あおちゃん、今ことり、かわいくないから」

「ううん、十分可愛いよ。だからそのまま、ちゃんと聞いてね」

返事をする前に唇を塞がれる。恥ずかしいやら嬉しいやら、複雑な気持ちを抱えながら碧ちゃんのブレザーを握った。

「不安にさせてごめん。色んな表情を見てみたくて、自分勝手に振り回してた。ごめんね」

「んー、ん……ことりが先にイジワルしたの……碧ちゃんは悪くないんだよ……っ」

「でもやり返したのは私、大人気ないのもね。今だってほら、泣いてる人に無理矢理キスしちゃった」

反省なんて微塵も感じさせないイタズラな笑みを浮かべ、彼女は私の頬を大きな手で包んだ。ひんやり、優しさを感じる温度。私には勿体ないくらいいの、碧ちゃんは良い人。

「好きだよ、ことりちゃん。ずっと、初めて逢った時から」

「……思い出してくれたの？」

「うん、遅くなつてごめんね。それで、ことりちゃんの気持ちは聞かせてくれないのかな？」

「聞いてた。じゃん」

「独り言なんて聞いてないよ。だからちゃんと教えて。私のこと、どう思ってる？」

まっすぐな瞳に見つめられると、ウジウジ悩んでいた自分が馬鹿らしくなっていく。何を考えていてもきつと、彼女には筒抜けてしまっ
そうだ。

素直な、私の気持ち。面倒な女だって思われるのが怖くて言えな
かった、拗らせた片想い。

「……好き、大好き。あの日碧ちゃんが声掛けてくれた日からずっと。
ことりの方が、ずっと好き」

「やっとな聞けた」

「ごめんね、碧ちゃん」

「お互い様じゃない？」

「そうかな」

「そうだよ、そうしよう。ほらおいで」

優しい声に導かれるように、彼女の腕の中に収まった。背中をさす
る手も、好きと幾度となく告げてくれるその声も全部、欲しかった優
しき。今まで甘えきつて離せなかった温もり。

「碧ちゃん、あのね」

「うん、なに？」

「こんな私だけど、お付き合い、して欲しいですっ」

「喜んで」

軽口が混じったその一言を聞いた瞬間、収まったはずの涙がまた溢
れてきた。呆れたように笑う声が耳のすぐ隣で聞こえて、また幸せが
大きく膨らんでいく。

いいのかな。こんなに幸せで、身に余るくらいだよ。

そんな不安を知ってか知らずか、一定のリズムで背中をさすられ
る。暖かい手に、少しずつ体を委ねていった。

形勢逆転？

晴れて愛おしい人と恋人になったわけであるけれど、その事実には狼狽えて顔を赤くしているのは私ではなくことりちゃんの方である。かつてのやり取りは見る影もなく。手を繋ぐのはまだしも、髪を梳いたりなんて付き合う前からしていたと言うのに。

「照れすぎ」

「だつてえ……」

「ことりちゃんが言ったんですよ、ヘアアレンジしてって」

「でもでもっ！」

「ジツとしていてください」

「どうでもいいけど、アンタ達イチャつくのやめなさいよ。お騒がせカップルが」

「その件については本当にすみませんでした。再三言いますが要求してきたのはことりちゃんですからね。私じゃないです」

「イチャつくくなって言ってるの」

ため息混じりに不満をこぼすにこ。未だに逃げ出したい衝動を真姫によつて無理やり抑えられていることりちゃん。真正面に綺麗な顔がある時ってなぜだか困るよね。

「……はい、終わりましたよ」

「はあ、やっと終わった……碧ちゃん鏡取って」

「自分にヘアアレンジをするわけではないのでクオリティは保証しかねます」

「わあっ……三つ編み上手だねえ」

「自分の髪弄らないなら誰の弄ってたん？結構キレイに出来とるけど」

「真姫が小さい頃、”おねえちゃん髪かわいくして!”って」

「碧っ！」

「ぶっ……!?!」

ベチンと音を立てて真姫の手が私の口を塞ぐ。痛いと言議することも許されず、不満げに睨まれた。そんな顔したって怖くなんてないし、思春期の妹からの抵抗なんて可愛いものである。

「ずいぶん甘えんぼさんやったんやねえ、真姫ちゃん」

「そうですね。甘やかしすぎた自覚はありますが、私にだけは素直に甘えてくれた記憶があります」

「碧、それ以上言ったら怒るわよ」

「はいはい」

ご機嫌取りのために真姫の頭を撫でる。不服そうに顰めていた顔は次第に和らいでいく。昔からそうだ。どれだけ構ってやれなくて拗ねてしまっても、こうしているだけで機嫌が治ってしまう。真姫は私のことを単純なんだと言うけれど、私からすれば単純なのはどっちだと言う話である。

「……碧ちゃん、ことりに言うことは?」

「心配しなくても可愛いですよ。何を期待していたのかは知りませんが」

「ばかっ」

「碧ちゃん、凜にもやって!」

「凜も? いいよ、おいで」

「わーい!」

「何がいい?」

「三つ編み! ことりちゃんとお揃いがいいにやあ」

「分かった、ちよつとだけ大人しくしててね」

「はーい!」

「……これはさすがにことりに同情するわ。大変ねあなたも」
「ことり悪くないよねえ……?」

なんと不名誉な会話だろうか。シュンと、まるで子犬が耳を垂れて寂しそうにするかの如く、ことりちゃんは静かになってしまう。恋人をからかうのこそが楽しいのであり、真の意味で鈍感なわけではないのだ。うん、そのはず。

だがしかし、機嫌を損ねて後でワガママ放題になってしまっても些か困るのは確かだ。

「はい、凜。出来たよ」

「ありがと、碧ちゃん！」

「で、ことりはいつまで拗ねてるのかな」

「……へっ？碧ちゃん今名前……！」

「ことり、おいで」

「えっ……と」

「駄目。ちゃんと来て」

小動物のようにトコトコと歩み寄ってくることりちゃん。その体を抱きしめて捕まえて、それから目を合わせてあげる。彼女が私の目が好きだっていうのはとっくのとうに知っていた。

「聞きたいって言ってたよね。昔のこと」

「昔の？」

「どうしてあの日、ことりに声を掛けたのか。気にならない？」

「……水を差すようで申し訳ないんやけど。うちめっちゃ気になるそれ」

「……ことりも。知りたい、碧ちゃんのこと」

「じゃあちゃんと聞いててね」

プロローグの情景

小さい頃から、家に遊びに来る人はたくさん居た。祖父母の知り合いや父の医者仲間、母の同級生など。そうして真姫とも出会って、内向的だった世界が少しだけ広がっていくのを感じていた。

そんなある日、夕暮れが窓から射す廊下で亜麻色の髪の少女を見つめることになる。幼心にもその子がすごく可愛い子だと思ったのは、一連を思い出してから取り戻した確かな感覚だ。

「……きみ、どうかしたの?」

「お母さんたちがお話してて、ことりつまんないの。あなたは?」

「私は、本をよんでいたら足音がきこえたから。同じくらいの子がこの家にいるの、はじめて見た」

真姫が遊びに来る時は、私も一緒に出迎える日。1人で遊んでいていいよと両親に頭を撫でられた日に、同じ年くらいの小さな子が家に居たことなんて無かった。ましてやこんな可愛らしい女の子なんて。

「大きなお家なの?」

「一人っ子なんだ。ねえ、よかったらいつしよに遊ばない?たいくつなんでしょ?」

「いいの?本をよんでたんじゃ……」

「あとでもよめるよ。私はことりちゃんと遊びたい」

「……うんっ、ことりもあそびたい!」

嬉しそうに笑う彼女の笑顔。それが見ただけで本を閉じた意味はある。2人の小さな手をギュツと繋いで広い家の中を遊び回った。使用人の微笑ましい笑い声も、大広間の向こうの談笑も気にならないくらい、夕焼けの世界はまるで2人しかいないみたいで。

外が段々暗くなり始めた頃、少女を送り届けようと思って大広間に向かう。タイミング良く出てきた母親を見つけて、彼女は私の手を離

してしまった。名残惜しさを噛み締めて、笑顔の君に手を振ったんだ。

「またね、ことりちゃん」

「うん！またあそぼうね！」

結局、その亜麻色の少女が遊びに来たのはその日だけだった。親の都合だつて言うのは聞かずともわかっていたし、駄々をこねるほど融通の効かない子供でも無い。

家に遊びに来る子は、真姫以外にいなかった。元々人見知りだったからそれでも良かった。

ただその日一緒に遊んだあの子は、楽しんでくれていただろうか？ そう気になって仕方なかったけれど、自分から両親に尋ねることはしなかった。ただいつか、あの子と会えるといいなって祈りながら。そんな思いとは裏腹に時の流れは何とも残酷で、成長していくうちにほとんどを忘れてしまっていた。

そうしてライブで彼女を見つけて、恋に落ちて、音ノ木に来て、ことりちゃんと再会して。それはきつと、私がいつまでも亜麻色の髪の少女を覚えていたから。名前や顔が朧気になってしまっても、あの1幕だけは心の奥にあったから。

運命なんてきな臭いものは信じないけれど、もしも本当にそんなものがあつたなら、きつと私たちを導いてくれたんだろう。

2人それぞれ

「……忘れてたというより、来なくなった君に拗ねていたのかも」

「碧ちゃんと出逢った後にね、穂乃果ちゃんや海未ちゃんと仲良くなったの。だからお母さんも、家で一人のこ事を心配する必要無くなってる……」

「分かってる、どうしようもない事だからね」

「ロマンチックな話ですね。私も穂乃果も、小さい頃に会ったことがあるとしか聞いていませんでした」

「あんたら初恋拗らせすぎなのよ」

「えへ、その通りではあるんだけどね。碧ちゃんのことを好きになったのは、碧ちゃんが王子様に見えたからかも」

「私が？」

ピッタリ私にくっついて、彼女は口を開く。もうそろそろ普通に恥ずかしいから一度離れて欲しいのだが、初めに強引に抱きしめたのは私の方だと思い出してしまった。本当に、彼女相手なら我儘になる自分が少し嫌になる。

「私を退屈から救ってくれたでしょう？それに、全部は思い出せてないよ？」

「……もうお手上げです。教えてくれませんか？」

「碧ちゃんあの日ね、ちゃんと何回も可愛いって伝えてくれてたんだよ」

私を救ってくれて、教え切れない程の愛情をくれた子。どうしてそんな子を忘れることが出来るのか。そう笑った彼女は、幼い頃の面影を残していて、それでいて妖艶に見えた。

「……これ、みんなの前で話すんじゃないかった。ほんとに恥ずかしい」「ふふ、久しぶりにそんな顔見れた」

「見ないで。ていうかもうキャパオーバー、離れて」

「誰かさんが最初に抱きしめたんですけど〜？」

「仲良しさんやねえ」

「良い事じゃない」

「TPO弁えて欲しいけどね」

「善処します♪」

「こどりのそれは一切そのつもりが無い時の言葉じゃありませんか……」

顔を見ずに話せるのが1番楽だと思って後ろから抱きしめたけれど、首だけを振り返らせて私に笑いかける笑顔が可愛くて、やっぱり私は彼女に敵わないことを思い知らされた。でもニコニコしながら人の袖を握りしめるのはちよつとやめて欲しい。

「……そう言えば碧って、敬語外して話せるのね。海未みたいに癖なんだと思っていたわ」

「ああ……いえ、癖ではありません。小さい頃から大人と話すことが多くてそれで、他人には敬語が当たり前になりましたから」

「同級生とかどうしてたの？」

「……話すことがありませんでしたから、……」

「友達いなかったんだにやあ……」

「凜ちゃんっ……!」

「その通りなんだけど……これでも、外せるようにはなってきたんですよっ。」

「碧ちゃんあの時が1番コミュ力高かったんだねえ」

「ことりちゃん追い討ちかけるのやめてください」

可愛い恋人からの追い討ちが1番心に刺さる。笑いを堪えられずに吹き出した穂乃果が、涙を掬った。そこまで笑わなくなっていたいいじゃないかと反論。穂乃果はでもと口を開いた。

「碧くんがコミュ力高くなって良かったねことりちゃん」

「イジメですか……?」

「だってほら、モテモテだよきつと」

「……!」

「そんなわけないでしょ。穂乃果、適當を言うのはやめ……」

「やっぱりダメ! 碧ちゃん今のままコミュ障でいて!」

「うぐっ……」

「ことりのだから、誰にも取られちゃイヤだよ!? 思わせぶりな態度と
かもダメ、ゼーったいダメ!!」

「いやあの……はい」

「……ふ、碧が言い負かされてるの珍しいわね」

ついに真姫まで堪えられなくなって吹き出した。自然と彼女に悪態をつこうとは思えなかった。彼女に掛けた多少の迷惑と、普段の感謝がそうさせる。

「おめでとう、最愛の姉さん?」

「……ありがとう、愛しい妹さん」

「なーんか良い感じになってますけど。ことりのこと忘れないでく
れませんかね?」

「忘れてないですよ、君の話をしていたんですから。それよりそろそ
ろ解散しないと、下校時刻ですよ」

「あ、本当だわ。にこ、鍵は借りっぱなしでいいの?」

「ええ、許可取ってるわ」

「碧ちゃん今日寄り道していい?」

「駄目です。今何時だと思ってるんですか」

「子供じゃないんだけどなあ」

「駄目です、明日にしてください」

「はあい」

「なんやことりちゃんホントに子供みたいやね」

「んー、ていうよりね」

ことりちゃんは希の元へ向かい、何かを耳打ちする。しばらく2人で小さく笑いあったりしているのを見て、今度は私に穂乃果が「妬かないの?」と囁いてくる。もう一度2人に目を向け、それから3秒程度考えて、うん、やっぱり。

「妬いたりしませんよ、彼女の方が愛が重いので」

「碧ちゃん聞こえてるからね?」

「何を話していたんですか?」

「ナイショです」

「じゃあ私も。ことりちゃんへの秘密を増やしておくことにしますね」

「それとこれとは違うと思うな?」

「一緒ですよ」

なおも不満を告げる彼女の手を取って、部屋を出た。喧騒の主犯2人で先に逃げ出して、静かすぎる廊下を歩く。どうしたのなんて咎める声はなく、ただ柔らかく小さな手が私を握り返す。彼女の心に私の後ろ姿はどう映っているだろう。自分勝手だなんて思われていないだろうか。

「妬いたりなんてしないよ。だってことりは私の恋人で、ずっと待たせちゃったんだから。今さら私以外の彼女になんてならないって知ってるから」

「うん、ならない。でもことりはちよつとだけ碧ちゃんのこと心配だよ?」

「え、そんなに信用ない?付き合ってから結構な頻度で好きだって伝えてる気がするけど」

「碧ちゃん優しいから、女の子勘違いしちゃうんだよ。気づいてないでしょ?」

「だってまあ、興味無いからね」

私がそう言うと、嬉しそうな彼女の声が聞こえた。繋いだ手は2人の体温が混ざって熱いくらいで、それでも離そうとは思えない。

立ち止まって振り返れば、無防備なくらい頬を緩くしたことりちゃんを私をジッと見つめている。

「ねえ、さつき希と何話してたの？」

「碧ちゃんいつも私のワガママ絶対叶えてくれるから、甘えたくなっちゃうんだ」

「……予想の斜め上を」

「えへへ、碧ちゃんのせいだよ？」

「責任を押し付けない。でも……うん、確かにそうかも」

「へ？」

「泣かせないって決めたから、そりやあ多少無茶してでも笑ってほしいと願うよ。私は欲張りだからね」

蜂蜜色の瞳が驚いて丸くなって、それからまたふにやりと笑った。そういう顔。私だけを見て感じて、私に向けてくれる優しい笑顔。気づいたら浮かんでいるような、そんな表情を見ていたくなる。

「やっぱり、寄り道して帰ろうか。どこに行きたかったの？」

「んー、怒らない？」

「もちろん」

「碧ちゃん、お泊まりしたい。今日これから一緒に同じお家に帰って、同じご飯を食べて、一緒に眠って朝を迎えて、それから部活に行きたいな」

「いいよ、そうしようか」

「やったー！」

喜びを隠しきれずに私の腕をキツく抱きしめる彼女。

ことりちゃんが要求するそんな半日は、いつしかルーティンになっ

ていくのだから。

後ろから追いかけてくる足音と声。一足先に曲がり角を進んだ私
たちは、誰にもバレないように柱の影でその距離をまた少し詰めた。